

西洋史学

◇教員◇

教授：橋場弦、長井伸仁、勝田俊輔、池田嘉郎

准教授：北村陽子、菊地重仁

助教：小西正紘

◇学生◇

学部：48名、修士課程：15名、博士課程：17名

(1) はじめに

グローバル化の波にさらされ、変化し続ける現代社会においては、短期的な現状分析ではなく、過去から現在までを長期的・複眼的に見通す歴史学の思考法こそが、錯綜する情報を的確に選り分け、未来を見据えた判断を可能とする。すなわち我々の目指す歴史学とは、悠久の時の流れの中に揺るぎない視座を確保する営みに他ならない。

西洋史学専修課程における研究と教育は、時代的には古代から現代まで、地理的にはヨーロッパを中心としながら、南北アメリカやアジア・アフリカとの関係も射程におさめる。西洋史学専修課程の専任の教員（教授、准教授）は現在6名であり、それぞれの研究分野を代表する歴史家である。授業は、教員各々の専門研究にもとづいた「特殊講義」と「演習（ゼミ）」が中心となる。前者は教員が講義する形式で授業が行われ、後者は史料や文献の講読、および参加者の研究発表が中心となる。また教養課程2年生を対象に、必修の講義として「西洋史学研究入門」および「史学概論」を開講している。2023年度からは、1・2年生向けに教養志向の講義として「西洋史学へのいざない」も開設されている。

西洋史学の学生各自の研鑽は最終的に「卒業論文」にまとめられるが、その指導のために、教員による「卒論ガイダンス」および博士課程の大学院生（TA：ティーチング・アシスタント）が主催する「サブゼミ」も実施される。このように授業以外の場でも、最新の知識や方法論について助言できる体制が整っているが、西洋史学は学問の自由と自主性を重んずる。学生は機会を捉えて積極的に教員や大学院生などから話を聞き、主体的に自らの学習・研究に取り組むことが求められる。

(2) 研究室について

西洋史学は、文学部屈指の大所帯である。2024年度に在籍する学生の数は、大学院生をふくめて合計で80名になる。大学院生の存在感が大きいことも西洋史学の特色であり、教育とならんで研究にも大きな比重がかけられている。助言を与えてくれる先輩には事欠かないだろう（ただし、常に10名前後の大学院生がアメリカやヨーロッパ各地に留学している）。

法文2号館1階、総合図書館に最も近い一角に西洋史学研究室があり、基本的に入出入り自由である。入口近くには新着雑誌の棚があり、その右手で助教、事務補佐の嘱託が勤務している。助教は若手研究者であると同時に学生と教員の重要な仲介者であり、研究室事務をとりまとめる。奥の談話室には、辞書や項目事典をふくむ様々な参考図書が配架されている。西洋史学の対象範囲の広さを反映して、英・独・仏はもちろん露・西・伊・羅・希など、西洋諸言語の図書が四方の壁を埋めている。

進学後は教室や図書館に通うのと同じように、研究室に顔をだすことが望ましい。授業の予習や調べ物をすることもできるし、履修のコツや教職、卒論、サブゼミなど、様々な情報の交換もなされる。飲食も自由である。文字通りのサロンである談話室を大いに活用し、研究室で同級生、先輩学生、助教等と交流することで、学生生活を豊かなものにできるだろう。

また、研究室旅行も重要な伝統行事の一つである。学部4年生が幹事となり、5月の中旬に2泊3日の日程で開催される。近年では、伊東（2013年）、箱根（2014年）、伊豆熱川（2015年）、伊豆長岡（2016年）、下田（2017年）、信州上田（2018年）、鴨川（2019年）、伊豆高原（2023年）を訪れている。教員全員と大学院生の有志も参加する。例年、夕食後は教員を囲んで、あるいは学生同士で立場や年齢の違いをこえた熱い議論が交わされる。この旅行を通じてはじめて「研究室の一員になった」という実感を抱く3年生も多いことだろう。

このほか、研究室では進学者歓迎会や卒業祝賀会が開かれ、またゼミごとに交流会・懇親会が開かれるなど、教員・学生間の交流がさまざまな機会でなされていることも、西洋史学の特色の一つである。

(3) 専任教員の紹介

橋場弦教授は、古代ギリシア史、とくにポリスの民主政研究を専門とする。主著は『アテナイ公職者弾劾制度の研究』（1993年）、『丘のうへの民主

政』（1997年）、『古代オリンピック』（共編著、2004年）、『賄賂とアテナイ民主政—美德から犯罪へ』（2008年）、『民主主義の源流』（2016年）、『古代ギリシアの民主政』（2022年）である。

長井伸仁教授は、フランス近現代史を専門とし、パリの政治史・社会史、近代フランスにおけるカトリシズム、歴史意識と政治文化などについての研究を行っている。著書に、*Les conseillers municipaux de Paris sous la Troisième République (1871-1914)*（2002年）、『歴史がつくった偉人たち—近代フランスとパンテオン—』（2007年）、『近代パリの社会と政治—都市の日常を探る—』（2022年）がある。

勝田俊輔教授は、近代のブリテン諸島（グレートブリテンとアイルランド）を専門とし、とくにアイルランドにおける農民運動やダブリン都市史、連合王国の国制史などに着目して研究を重ねている。また近年、近世・近代のヨーロッパにおけるコスモポリタニズムの研究も行っている。著書に『アイルランド大飢饉—ジャガイモ・「ジェノサイド」・ジョンブル』（共編著、2016年）、*Rockites, Magistrates and Parliamentarians: Governance and Disturbances in Pre-Famine Rural Munster*（2017）などがある。

池田嘉郎教授は、ロシア近現代史を専門とし、第一次世界大戦からスターリン時代までの国制史を、帝国論や政治文化論を取り入れながら研究している。著書に『革命ロシアの共和国とネイション（山川歴史モノグラフ）』（2007年）、『ロシア革命』（2017年）、編著に『第一次世界大戦と帝国の遺産』（2014年）、『国制史は躍動する』（共編著、2015年）がある。

菊地重仁准教授は、西欧中世史、とくにフランク王国史を専門とし、カロリング朝期の政治文化、統治構造、修道制などを、文書形式学・書冊学的観点も取り入れつつ研究している。著書に*Herrschaft, Delegation und Kommunikation in der Karolingerzeit. Untersuchungen zu den Missi dominici (751-888)*（2021年）がある。

北村陽子准教授は、ドイツ近現代史を専門とし、とくに二つの世界大戦期の戦争犠牲者（戦争障害者、戦没兵士遺族）をめぐる社会史を、ジェンダー関係論や表象文化論の視角を取り入れて研究を進めている。著書に『教育支援と排除の比較社会史—「生存」をめぐる家族・労働・福祉』（共編著、2016年）、『戦争障害者の社会史—20世紀ドイツの経験と福祉国家』（2021年）がある。

大学院への進学を希望する学生には、各教員の著書をはじめ、西洋史に関する書物を繙き、西洋史学の学問的雰囲気やさぐることを勧めたい。

『岩波講座 世界歴史』（新シリーズ）や、近藤和彦（編）『西洋世界の歴史』（山川出版社）、『世界の歴史』全30巻（中央公論新社）、『世界歴史大系』（山川出版社）なども有益であろう。

専任教員以外にも、他大学から非常勤講師を招き、それぞれの専門に即した授業を担当していただいている。2024年度には5名の専門家による古代ギリシア史、ヘレニズム史、中世ベルギー史、近世イングランド史、近代フランス史を主題とする講義が開講される。

（4）進学のまえに

西洋史学専修課程への進学希望者は、教養学部時代から多くの読書体験を重ね、知的関心を広げておいてほしい。ただし、ただの歴史ファン、もしくはクイズ型の知識のみに偏った歴史マニアでは、専門的な歴史研究はおぼつかない。専門研究のためには、まずは歴史関係の講座やシリーズ、新書を含む単行本はもちろん、人文・社会科学の基本文献や話題の書物を読んでおくのがよいだろう。古典に属する文芸作品も有益である。こうした幅広い読書によって、進学するまでに、研究したい時代・地域・分野をおおまかに見つけ出せるとよいが、しかしそれにあまり固執する必要はない。研究テーマは進学後に変更されることも多い。むしろ専門外の知識を積み重ねることを通じて、専門研究がもつ意味合いを広い視野から眺め、教養と専門とを知的に往復できるようにすることが肝要である。

第二に、外国語は西洋史学にとって生命線とでもいうべき手段である。教養学部時代にじっくりと勉強しておいてほしい。すくなくとも、英語と第二外国語を正確に「読む」力をしっかりと身につけておくことが不可欠である。その場合、「読んだ」内容を正確に表現することも求められるので、日本語の表現能力も軽視すべきではない。なお、古代史を志す場合にはギリシア語・ラテン語を、中世史ではラテン語あるいはギリシア語を、また近現代史ではそれに対応する地域の言語の学習を始めておくことが望ましい。

第三に、当専修課程に限ったことではないが、人文系の学問にあっても電子メディア・デジタルツールの利用は必要不可欠である。電子データ解析に熟達すると、従来の歴史学では見えなかった新たな問題や解法がひら

けてくることがある。デジタル技術の基本は早めに体得しておいてほしい。

(5) 卒業後

卒業生は、マスコミ・出版、金融・保険、サービス、製造、商社など、各種の一般企業、国家公務員、地方公務員、高等学校の教員など、幅広い分野で活躍している。歴史的視野を備えた人材を育成し、各界に送り出すことも、西洋史学専修課程の大切な役目である。

また例年、東京大学大学院人文社会系研究科(西洋史学専門分野)をはじめ、国内及び海外(欧米)の大学院に進学を希望する者が少なくない。進学を考えている者は、教員や大学院生、助教と早くから接触し、研究や生活などについて話をきくことが望ましい。自分の道を発見する機会となるだろう。昨今では、人文系の研究者を志望する人たちの将来について悲観的な見解がメディアを賑わせているが、こうした情報にはかなりの偏りも見られる。大学院生には各種の奨学金が用意されているし、能力と努力によって道はひらかれることも付言しておきたい。